

私の家族は ハイスペック です! 3

落ちこぼれ
★転生末姫ですが
溺愛されつつ世界
救っちゃいます!
★



著 りーさん

Illust. az な

◆ 投影の魔鏡 ◆

人に下賜された後、
女神のところに戻っていない神器の一つ。
自分の望む景色や人物を映し出す能力を持つ。

◆ 魅惑の銀鐘 ◆

投影の魔鏡たちと
行動を共にしている神器の一つ。
神器たちからは
「口説き魔」と言われている。

◆ 神聖なる水鏡 ◆

王宮に保管されていた守護の神器。
プライドが高く、アナスタシアと
契約することを決めている。

◆ アナスタシア ◆

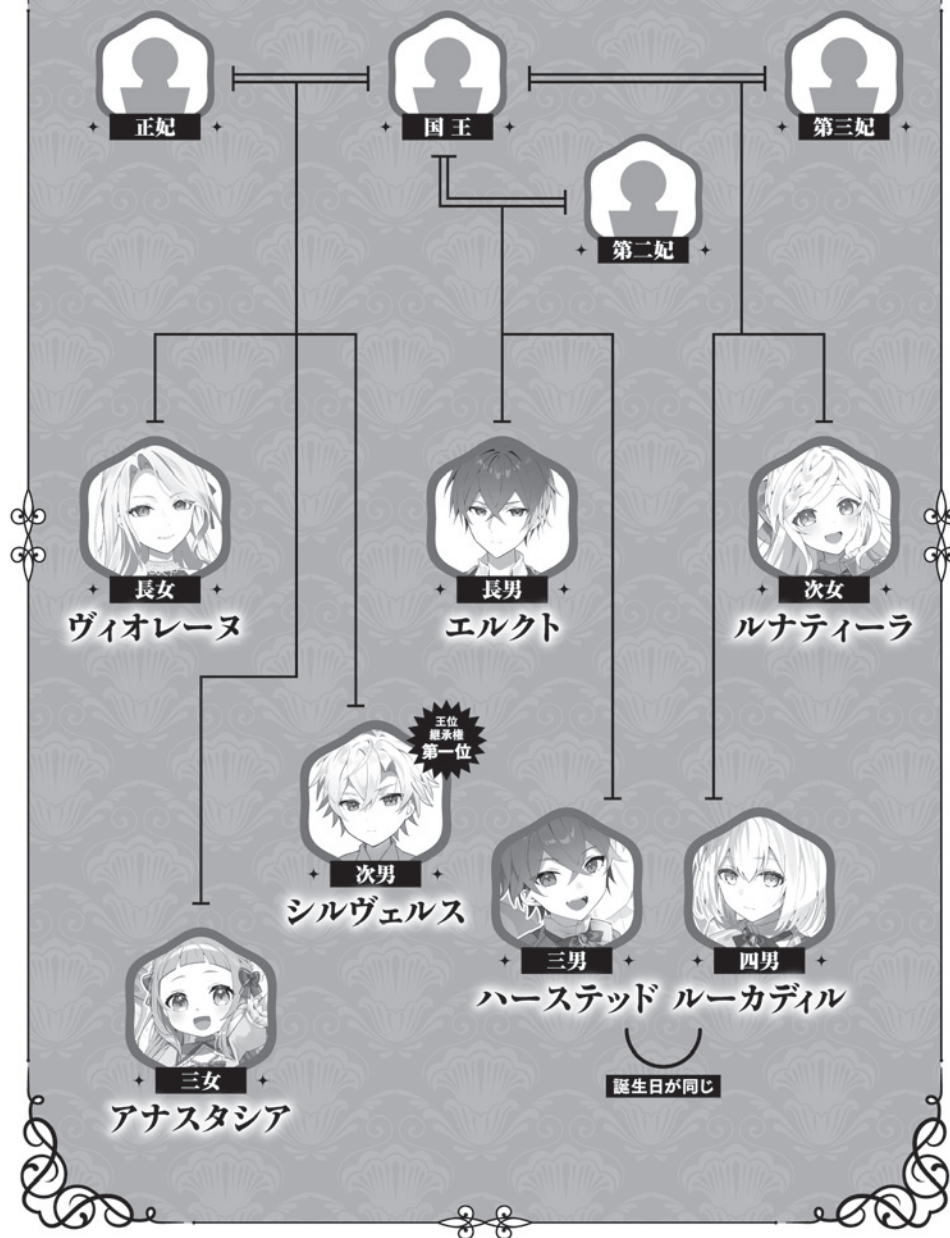
本作の主人公。
魔力なしの落ちこぼれ転生末王女。
女神の頼みで、各地に散らばった
神器を密かに集めることに。

◆ 主な登場人物 ◆

◆ ライ/神雷の金剣 ◆

女神より与えられた神器。
本性は剣だが、姿を変えて
アナスタシアの側にいる。

・アルヴェルト王家 系図・



プロローグ 深まる疑惑

王女アナスタシアと今は彼女の側近となったカイエンが学園で神器に襲撃されたあの騒動から一週間後、アナスタシアの兄で長男のエルクトは、父である国王により呼び出されていた。

「お前に聞きたいことがある」

「学園での騒動のことでしたら、すでに報告が届いているはずですが」

エルクトの視線は、国王の執務机の上に積まれた書類に向けられる。

「そうではない。その騒動の最中にお前が城に戻ってきた件だ」

「それでしたら、陛下にいち早くお知らせするためと、報告の際に申し上げたと思いますが」

エルクトの言う通り、彼は城に戻ってきて真っ先に国王と妃のもとに向かい、学園での騒動のことを伝えていた。

決して間違った判断とは言えないし、エルクトもすぐに学園へと戻ったが、不審な点がなかったわけではない。

「アナスタシアの世話している動物を学園に連れていったそうだが」

「騒動に巻き込まれたショックからか、アナスタシアがろくに話せていなかったたので、あの動物で

も連れていけば気が紛れるかと。現に、連れていくと喜んでいる様子でした」

まったく表情を変えずに淡々と告げるエルクトを国王は訝しむ。

そんな理由などあるかと思うが、アナスタシアが空から降ってきた直後は震えるばかりでろくに話せていなかったという報告は、他の王子や王女から受けていた。それゆえ、この説明にも一定の理解を示さざるを得ない。

アナスタシアがああ動物を可愛がっていることは国王も知っている。侵入者から攻撃されて恐怖心を抱いた気持ちを落ち着かせるためというのであれば……少なくとも、動物を連れていったのがアナスタシアのためというのは確かなのだろう。それにああ動物を連れていったところで、エルクトに利があるとは思えない。

だが、その後になぜか魔法薬の素材を惜しんで学園の森のほうに向かったという報告があることから、本当に恐怖を抱いていたのかという疑問が生まれており、素直に納得できるものでもない。

「ご用件が以上でしたら、これで失礼させていただきます」

「……ああ、戻れ」

国王が退出の許可を出すと、エルクトは一礼して静かに部屋を出ていく。

部屋には国王と側近のルーカスが残された。

「……やはり話さんか」

「予想していたことではあるでしょう」

ルーカスの言葉に、国王は深くため息をつく。それは呆れから出たのか、もどかしさから出たのか、本人にもわからなかった。

「……報告を」

「はい」

ルーカスは学園から届いた調査報告の内容を告げる。

先日、アナスタシアとカイエンの証言も報告されていたが、二人を襲撃した存在や、カイエンの目撃した子どもについてはわかっておらず、学園は調査を行っていた。

「正体不明か」

「はい。明らかな魔法戦闘の痕跡がありますが、国内に該当する者はいないと」

学園の森は木々がなぎ倒され、撤去した後には開けた空間が広がっていた。明らかに魔法によるものだが、そのような大規模な魔法を行使できる魔法使いは存在が確認されていない。

できるとするならば、アルウェルト王家の血筋の者くらいだろうが……ほとんどの者は騒動の鎮圧に動いており、現場にいたのはアナスタシアとエルクトのみ。アナスタシアではあのような魔法の行使は不可能であり、エルクトは本人が否定している上に、剣を主体とする彼の戦闘スタイルとも合わない。

「今回の件もそうですが……アナスタシア王女の周りでは不可解なことが多いように思われます」
幼い頃から暗殺者に狙われるなどしていたが、それは王族ならばそうおかしいことではないとい

う頻度に留まっていた。

だが少女式——六歳になるときに生きていることを神に感謝する儀式で、その際に神から技能や魔力など何かしらが下賜される——の後から、王女には不審なところが目立つようになった。

部屋では誰かと会話をしているかのような一人言が多くなり、表情をコロコロと変える。

その程度ならばまだいい。他にも騒動を起こしており、極めつけは国宝のペンダントが盗まれた際に、なぜかアナスタシアは寝間着姿のまま外出し、犯人と対峙していた。

エルクトからの報告では、不審者を見かけて後を追いかけてしまったとのことだったが……素直に頷くことができない。

「侵入者を撃退した存在も、アナスタシアが世話をしている動物の正体も、判明していないのだったな」

「はい。動物に関しては存在が確認されていないだけという可能性を見いだしておりますが、もう一つのほうに関しては、近ごろそのような報告がなく、調査も進められていない状況です」

アナスタシア王女を狙う侵入者が減ってきたのは、彼女がああ動物を見つけた頃からだったが、単なる偶然だろう。

ただ……どこか引くかかる。これを偶然で片づけていいとは、ルーカスには思えなかった。

「本当に偶然だと思うか？」

自分の心を見透かすかのような国王の発言に、ルーカスはぶるりと体を震わす。

「偶然、と片づけるのは難しいと思われます」

「エルクトから話を聞ければ早い……あやつは口を開かんだろうな」

エルクトは、国王の指示でアナスタシアの警護を行い、近況を報告する役割が課せられていた。その任は今も継続しているが、近ごろアナスタシアとの交流がやたらと増えている。

アナスタシアにエルクトが呼び出されることもあるし、エルクト自身も、アナスタシアについている護衛——影を追ひ払って二人きりになることがあるくらいだ。

「エルクトさまは何かをご存じだ？」

「そうでなければ、わざわざアナスタシアにつけている影まで追ひ払うことなどしないだろう。私に知られないための行いのはずだからな」

アナスタシアは知らないだろうが、彼女には王家所有の影を護衛として配置している。一度本人と接触しているが……とうに忘れられていそうだ。

「エルクトさまが難しいのであれば、アナスタシアさま本人に聞くしかないと思われますが」

「そうだな……」

国王は俯きながら、そう呟いた。

第一章 新入生歓迎パーティー

離宮の一室。私——アナスタシアは、ある人物を待っていた。

しかし暇で暇で仕方なく、ライ——トラの姿に擬態している神器『神雷の金剣』の毛並みを堪能するくらいしかやることがない。

『他にやるべきことはあるだろうか』

私にまさぐられているライは念話で語りかけつつ、部屋の一部を指差す。

そこには、本が山積みになっていた。その内容は、各領地の特産品に関する資料だったり、マナーについての教材だったり、すべて社交に関する参考書である。

『後でちゃんと目を通すって』

『そのセリフ、三日も言い続けてるぞ。その“後”とやらは、いつ来るんだろうな？』

ライの言う通り、どうしても読む気が起きない私は、後でやると言っらずと後回しにしている。でも、私も王女ですから。ちゃんとやりますよ……やる気が出たら。

『だから、そのやる気はいつ出るんだっつーの！』

『いつかは出る！』

『まったく出る気配がねえから言っただろうが！』

『いつもいつも飽きないよなあ……お前たち』

もう日常と化した、私とライによる他人から見れば次元の低い争いに、ペンダント——神器『神聖なる水鏡』が呆れ果てるという光景に、平和を感じる。

指輪の神器には逃げられちゃったし、まだラフィティクト公爵の暗躍の可能性とか、いろいろと考えないといけないことはあるけど、今はこの日常を味わっていたい。

『話をそらすな。勉強しろ』

『だからいつか……ね？』

今はその時ではない。時を待つのだ。

その後もうだうだ言うライをたしなめていたら、コンコンとノックが響く。

私が「どうぞ」と許可を出すと、ドアがゆっくりと開く。

そこに立っていたのは、私と同じくらいの背丈の少年。夜空を思わせるようなネイビーの髪はいつも以上に暗く、ルビーのような朱色の瞳は輝きを失っていた。

それだけで、何があったのか薄々察しがついてしまい、私は彼に同情の目を向ける。

「お疲れさま……カイエン」

「本当に、殺されるかと思いましたよ」

少年——カイエンは、深くため息をつきながら部屋に入ってくる。



私は、ベッドからクッションを一つ持ってきて床に置いた。

「座って休んで。お茶を頼むから」

私はベッドの傍らに置いてあるベルを鳴らす。すると、間もなく使用人がやってきた。

「私とカイエンのお茶とお菓子を持ってきて」

「かしこまりました」

私の指示を受けて、使用人はすぐさま立ち去る。

私が用意したクッションに座ったカイエンに、私は意を決して尋ねる。

「ルナティールお姉さまとシルヴェルスお兄さま？」

「そこに、ハーステッド王子殿下とルーカデイル王子殿下も加わっております」

全員やないかい！ いや、なんとなく想像はできていたけど、本当にカイエンに申し訳ない……！

「私のことになると、ああなるの」

「いえ、覚悟の上でしたので。あれくらい退けなければあなたの側近は務まらないとわかっただけ

でも僥倖きやうひんです」

カイエンは先日、私の側近となった。立会人はエルクトお兄さまで、エルクトお兄さまがお父さまたちや他の兄姉にも報告した。

みんな、私に早々に側近ができたことに喜んだのに、なぜか私抜きでカイエンに会いたいと言ってきたのだ。

そのためカイエンはわざわざ登城し、兄妹たちに会うことに。学園でやろうとすれば目立ちすぎるし、側近となったカイエンはお城の出入りも自由になったためだ。

だけど、兄妹たちの思惑に気づかないほど私もバカではない。私は事前にカイエンに、嫌なことがあればいつでも帰っていいと言いついて含めていた。

それでもカイエンは甘んじて受け入れたようだ。一体どんな会合だったのかは想像できないし、したくもない。

「それに、普段の癩癩に比べれば理屈が通っている分、遥かにましですよ」

「普段の癩癩？」

「ええ。頭を殴られたり、髪を引っ張りあげられたり、胸ぐらを掴まれたりしています」

「それ癩癩じゃなくて暴力だよ！」

六歳になんてことをしてるんだ！ どうしてカイエンはそれを癩癩で片づけられるの？

「誰にやられてるの？ 私ががつんと言うよ？」

「姉のルージャアです。しかし、アナスタシアさまの助けは必要ありません」

ルージャア……というと、カイエンの同い年の姉で、確か一年生の上級クラスに所属していたはず。伯爵家あたりの子女だと、本人の持つ魔力の関係から、学園では上級クラスと中級クラスの半々くらいに分かれることが多い。そんななかで上級クラス入りできるのは、さすがは魔力主義のルーメン派閥の幹部のご令嬢というところか。

でも、人間性にかなり問題がありそうだな。できることなら関わりたくない。

「それなら、私の側近になった時も何か言われてそうだけど」

「ええ。無能には無能がお似合いねと嘲笑あざわらわれましたよ」

「あつ、本当にそう言われたんだ……」

カイエンが側近の誓いをしてくれた時に、家族のことを聞かれてそんな風に言うだろうと答えていたのは覚えていた。

「ということ、伯爵は……」

私のその言葉に、カイエンはにこりと笑みを返すだけ。それが答えたということに気づき、私はそれ以上は何も聞かなかった。

◇◇◇

使用人たちがお茶とお菓子を持ってきたので、二人でお茶をする。

カイエンには、側近は本来は主の後ろに控えているべきで、向かい合って一緒にお茶を嗜たしなむようなことはしないと言われた。

だけど、私がお茶を用意してもらったのはカイエンを労いたわためなので、主としての命令という形で向かい側に座らせている。

「それで、あれはなんですか？」

カイエンの視線は山積みになった本に向かっている。

「私の……教材」

「……座学の認定試験は合格してらっしゃるのに、なんの教材ですか？」

「社交関係」

私がそう答えると、カイエンの目が冷たくなる。それは、お世辞せじにも側近にふさわしい目つきとは言えなかった。

「のんきにお茶を飲んでいる場合ですか」

「まだ余裕はあるから大丈夫！」

「あれは新人生歓迎パーティーに向けたものでしょう？ もう残り一週間ですが」

そう。私たちが学園のトラブルで慌ただしくしている間に、新人生歓迎パーティーがすぐそこまで迫っていた。

本当ならもう少し早い時期から学び直しを行うはずだったんだけど、私の場合は学園での騒動により学園から頻繁に呼び出しを受けていて時間がなかった。そのため、かなりギリギリのスケジュールで詰め込み教育が施されることになった。

とはいえ、今はそれもある程度は終わり、マナーを教えてくれる侍女のフウレイから合格はもらっている。ただ知識を衰えさせないように、当日までに熟読しておくようにと渡されたのがあの教材だ。

「私がゆつくりと勉強したところで頭に入らないから、直前で詰め込むほうがいいの」

「言って恥ずかしくならないんですか？」

「事実だから」

私だって真面目に勉強しているのだ。でも、新たな知識を得る度に、古い知識が抜けていくから仕方ない。

それなら一気に詰め込んだほうがいい。

「そういうカイエンはどうなの？」

「伯爵家として恥ずかしくない程度には振る舞えますよ。あなたの補佐は難しいかもしれませんが」私の補佐をする前提の言い方はやめてくれない？」

まるで、私一人では社交をこなせないとも言っているようなものじゃないか。

「申し訳ありません。学園での振る舞いを愚考しての発言だったのですが……」

カイエンが目尻を下げながら言う。私もあため息をつき、頬杖ほじづえをついて返した。

「……確かに普段の振る舞いを思うと、私もあなたを批判から庇かばうのは難しいかもしれないけど……」

「それはどういう意味ですか？」

「そのままだけど」

私がニコニコしながら答えると、カイエンは大きくため息をつく。本当に先ほどから振る舞いが

失礼な側近だ。

「ご安心を。私がこんな態度を取るのはアナスタシアさまと二人きりの時だけです」

「それが問題なの！」

普通は主を一番に敬うべきなのに、どうして私が一番下みたいな扱いを受けなくちゃならないんだ。

あと、厳密には二人きりじゃないんだよ。この場にはライとペンダントがいて、この会話もぼっち聞かれてるから。

カイエンには、まだライたちのことは話していない。神器探しに巻き込まないに越したことはないし、お兄さまのように突出した戦闘能力があるわけでもなさそうだから。

だからこそ、私もばれないように細心の注意を払い、神器たちにもカイエンという時は不用意に話しかけないように言っている。

「ではアナスタシアさまは、私が丁重に尽すことを希望なさるのですか？　我が君のお望みならば、今後はそのように振る舞わせていただきますが」

「……いや、それはそれで寒気がするから嫌だけど……」

なんだかんだ、カイエンとは一ヶ月ほど一緒に過ごしている。その間カイエンはずっとこのような調子だったので、急に側近として模範的な振る舞いをされると調子が狂ってしまうだろう。

我が君、と呼ばれるだけでもぞくりとしてしまうのに。

「でも、せめて周りと同列くらいにはしてほしい」

「それでは、他の王族の方々への無礼になるかと……」

だから、なぜそこで私を上げるのではなく、周りを下げる判断になるの！

「カイエンに常識的な振る舞いを求めるほうが間違ってたか……」

「アナスタシアさまにだけは言われたくないのですが」

「そんな私に言われるくらいに非常識という自覚を持ったら？」

さすがに言い返すことができなかったのか、カイエンは静かに目をそらす。

カイエンの私の評価が低すぎる気がする。一応、カイエンは自分の意思で私を選んでくれたはずなんだけど。

「……ともかく、勉強はなさったほうがよいでしょう。詰め込むにしても、読みきれなければ意味がないのでは？」

「……最悪徹夜すればなんとか」

「側近として、主が不健康な生活を送ることは容認しかねます。場合によっては、殿下方にご相談することになると思いますが」

「それはダメ！　勉強が厳しくなる！」

普段は私に結構甘々な兄姉たちだけど、教育関連だと鬼になるんだって！　それは、少女式の時とこの間の認定試験に向けての勉強で充分すぎるほどに味わっている。

王子や王女として教育されるとあんなのだろうか？

「では、大変、心苦しいですが、アナスタシアさまがお勉強なさらないことを相談するようにしましょう」

話聞いてました!?

そのままずっと立ち上がって出ていこうとするカイエンの服を掴む。

「待って！ やる！ やるから！ 今からやるから！」

出ていかせまいと、カイエンの服をぐいぐいと引っ張る。

カイエンは動きをピタッと止めて振り返り、笑顔で言う。

「では頑張りましょうか、我が君」

「うん……」

私は力なく頷いた。

『どっちが主かわからんな』

ライのぼやきが脳内に響いた。

◇◇◇

カイエンの策略により、泣く泣く勉強することになった私は、教材を読み込んでいた。

サボろうにも、カイエンが監督官のように後ろに張りついている。

勉強するからには真面目にやろうと、なんとか内容を頭に詰め込もうとはしてるんだけど……

「全然覚えられない……」

二十ページほど進めたところで、私は机に突っ伏した。

ちなみに、まだ一冊目である。

「まだ半分も終わってませんが」

「だから言ったじゃん。私は詰め込みじゃないと覚えられないって」

勉強は一夜漬けは意味がないと言うけど、それは記憶できる優秀な頭脳を持っている人だけが言えるセリフであって、ニワトリ頭に計画的な勉強はまったく意味がないのだ。

そして私は根っからのニワトリ頭である。前世でも、テストは前日に教科書を読み込むタイプだった。

頭脳くらいアルウェルト王家らしく高性能でもいいじゃないですか、女神さま。

『お前は中身が中身だからなあ……』

『ライ、カイエンがいるからあまり語りかけてこないで』

ライの野次を一蹴しつつ、私はもう一度教材を見る。でも、だんだん記号が羅列してあるだけのように見えてきて、ゲシュタルト崩壊寸前の状態だった。

「もう無理だあ……」

「それでよく座学の認定試験に受かりましたね……」

カイエンが呆れたようにため息をつく。あれは、お兄さまたちのスパルタ教育あつてのものだよ。言ったら呼ばれそうだから黙ってるけど。

「あの時は、合格したい理由があつたからだよ。でも、パーティーはどうしても完璧に終わらせた理由がないから、やる気が出ないの」

評判を得るために上々の結果を残そうという気持ちはあるものの、最低限王女として振る舞えればいいやと思っている私もいるのだ。

私は単純な人間だ。やる気は目標がなければ絶対に出てこない。

「要は、やる気が出ればいいと？」

「まあ、そうなるかな？　でも、やる気なんて出そうとして出るものじゃないし」

自分の意思で出し入れできるなら、私はとくにこの教材を読み耽ふっていることだろう。

「……そうですね。今は難しいでしょう」

カイエンの含みのある言い方に首を傾かしげる。その意味を、私は翌日に知ることとなった。

◇◇◇

翌日。私は今日も勉強していた。やらなかったらお兄さまたちに言いつけられそうだから仕方な

い。カイエンも監視のためか今日も側そばにいる。まあ、自宅では針のむしろだろうからそれは構わない。

でも、昨日もろくに内容が頭に入ってこなかったというのに、今日で劇的に変わるはずもなく、私は早々に机に突っ伏した。

「甘いもの……甘いものが欲しい……」

私の脳は深刻な糖分不足に見舞われていた。このまま勉強を続けたところで、何も入ってこないだろう。

「では、これでも食べてください」

カイエンはそう言つて、私にクッキーを渡してくる。

クッキーなんて頼んでたっけと思いながらも、念願の糖分を渡された私は、流れるようにクッキーを口の中に入れた。

「ん！　おいしい！」

食感はサクサクとしており、ほどよい甘さとバターの風味が口に広がる。

店で売っててもおかしくないよ、このレベル。

でも、なんかお城で食べたものとは味が違うような……？

「ねえ、これってお城のものじゃないよね？」

「はい。俺が作ったものなので」

カイエンの言葉にやっぱりと思つて二口目を食べようとした時、私はピタッと動きを止めた。

「作ったの!」

あのカイエンが!? という言葉は口から出ることはなかったけど、顔には出ていたのか、カイエンの目が冷たくなる。

「……そんなに意外ですか」

「だって、カイエンって伯爵家でしょ? 厨房に立つことなんてなさそうだから」

まだ男爵家や子爵家とかなら、使用人も多くは雇えないため、夫人が台所に立つことは珍しくない。その一環で、子どもが家事を手伝うこともある。

だけど伯爵家なら、屋敷に見合うだけの使用人を雇う財力はあるはずだ。

フォークマー伯爵家は、ルーメン派閥でも幹部クラスにいられるほど家の力も強いし。

「屋敷で作られたことがあるんですよ。よく使用人の真似事をさせられたので、その一貫で」

「……そうなんだ」

私は熟考した上で、そう返事することしかできなかった。お菓子を作る理由が、こんなにデリケートなものだとは思わなかった。

カイエンが普通の伯爵令息として過ごしてきたわけじゃないことは、今までの言動でなんとなくわかってたけど、なんかなあ……

ここまでとは思わなかったというか、それにしても貴族らしいところもあるというか……

うーん……言葉にするのが難しいな。

「お気になさることはありません。俺は気にしていませんので」

「でも、お菓子を作らされたんでしょ?」

料理というのは生活と趣味のために作るからよいのであって、人の指示で作らされるのは苦痛でしかないだろう。

カイエンって、料理好きな感じでもなさそうだし。それに、まだ六歳ですよ?

「叱責されるよりは、見下されるほうが遥かにましなので」

「そ、そう……」

一体、どんな扱いを受けてきたら六歳児がこんなこと言うんですか。その目も、まるで五十年は生きてきた大人みたいに達観してるし。

「でも、そのお陰でおいしいお菓子を食べられるから、役得って思っておくよ」

私がかみながらクッキーを食べると、呆れてる感じはあるけど、カイエンはふつと笑う。

「ええ、そう思っておいてください」

私はバクパクとクッキーを食べて、糖分を補給した。まだ何枚が残っているものの、糖分は充分だ。よし、勉強再開!

糖分補給をしたためか、それなりに捗る。はかどペースはあまり変わっていないけど、記憶に残りやすくなっている。

でも、いきなり全部を覚えられるわけではないので、半分くらいは脳内を素通りしてしまう。

そして、それを覚えようとすればするほど糖分は消費されていくのだ。
その結果――

「よし、休憩」

「早すぎませんか？」

私はものの十分で二回目の糖分補給をした。残っていたクッキーを二枚、口に運ぶ。まだ残っているから大丈夫、多分。

「このペースでは期限までに終わりそうにありませんが」

「大丈夫。追い込まれたらなんとかなる！」

「その根拠のない自信はどこから来るのですか？」

「実体験からだけ」

現に、スパルタ教育で身につけた知識や技術は、時間の経った今でも九割くらいは記憶に残っている。

だからこそ、私は追い込まれたら強いタイプだと思うけど、そんなことを詳しく話したらお兄さまたちを召喚するに決まっているので、墓穴を掘るようなことはしない。

でも、ある程度察しがついたのか、カイエンは私に背を向けて言った。

「そうですか。では、厳しい教育をなさるといふ他の殿下方に助力を仰ぎましょう」

「待って！ 大丈夫だから！ 自分でなんとかできるから！」

私はしっかりとカイエンの服の裾を掴んで止めたけど、カイエンはさりげなく私の手を振りほどいて部屋の外に向かう。

「追い込まれたらなんとかなるのでしょうか？ なら、エルクト王子殿下やヴィオレーヌ王女殿下あたりがいいいでしょうね。他の方たちはアナスタシアさまに甘そうですし」

「ダメ！ ヴィオレーヌお姉さまには言わないで！」

「わかりました。ヴィオレーヌ王女殿下にご相談します」

「わかってないよね!？」

本当にダメなんですって！ マナーに関することになるると本当に厳しいんだから、あの人！ ヴィオレーヌお姉さまのことだ。報告を受けたら、お妃のアリリシアさまやシュリルカお母さまにも話に行くに決まってる。

そうなったら、少女式の悪夢の再来だ……！

「あの人たちはね、頭のネジが爆発して吹き飛ばされてるの」

「……はい？」

カイエンが珍しくすっとんきような声を上げた。私は声のトーンを下げて言葉続ける。

「休憩は水と食事オンリー、おはようからおやすみまで隙間なしのぎちぎちプログラム。お菓子なんて甘いものは当然なし」

「……アナスタシアさま？」

カイエンは、振り返って私のほうに寄ってくる。私は、さらに声のトーンを低くした。

「アメなんてもらえずにムチだけ。いつもの笑顔は遥か彼方に消え去るんだよ」

「それで……？」

いまだに私の話が理解できていないカイエンをきつと睨みつけた。もしかしたら、軽く涙ぐんでいたかもしれない。

さすがに驚いたのか、体をびくつかせたカイエンの腕をしつかりと掴み、私はおもむろに叫ぶ。

「そんな教育を一週間みっちり受けてパーティーなんかに出たら、私は燃え尽きて死ぬに決まっている!!」

まだ少女式と認定試験はよかった。周りに人はいるものの、基本的には個々に行われる。

でも、パーティーとなると話は別だ。パーティーに限らず社交の場合は、基本的に人と関わらないことは不可能だ。常に笑顔を向けて、相手の言葉に神経を研ぎ澄ませていなければならない。

家族やカイエン相手とは違い、腹の探りあいが行われるのだ。

スパルタ教育でへとへの状態でそんなことをすれば、私は間違いなく途中で力尽きる。たとえ乗りきれたとしても、その後しばらくは燃え尽きて灰になっていることだろう。

私はカイエンの腕を握っている手の力を、さらに強めた。

「だから、一人でどうにかするの。わかった？」

「は、はい……」

「なら、黙ってそこに座ってて」

私が床を指差すと、カイエンは素直に床に座る。

それを確認した私は、再び勉強机に向き合う。

「私のことを思うなら、お菓子はちょうだい。糖分補給するから」

「かしこまりました……」

そのまま黙々と勉強をする私の脳内に、『おつかねえな』という声が響いた。

◇◇◇

どうにかフウレイの用意した教材をすべて読破し、パーティー当日を迎えた。

以前、お姉さまたちとお出かけした際に注文したドレスに身を包んだ私は、小さくため息をつく。

『ねえ、ついてきてくれない?』

『行かねえって言うてるだろ』

私は、部屋でくつろいでいるライに念を送るものの、ライからの返答は冷たい。

『だって、一人で行くのはやっぱりづらいし』

『どうせ、話しかけるなって言うんだろ。なら、俺がいてもいなくても変わらんだろうが』

『そ、それはそうだけど、もっとちゃんとした理由だってあるの』

『さっきのがちゃんとしてないって言ってるようなものじゃないか』

ペンダントの野次は無視して、私は理由を話す。

『指輪が乱入してくるかもしれないでしょ？』

『吸魔の指輪』という神器は、リルディナーツさまに回収を命じられた神器の一つでありながら、なぜかペンダント——水鏡のことを狙っている。

あの時はライに敵^{かな}わないと踏んで逃げられたけど、また来る可能性はある。だからこそ、ライに側にいてほしい。

『それなら、しばらくは大丈夫だろ。あのバカでも、お前が俺の主ってことには気づいてるだろうから、俺を警戒して現れないはずだ』

『でも、神器ってお互いの気配を感じ取れるんじゃないの？』

ライもペンダントの気配を感じて私を外に連れ出していたし、ペンダントも指輪の気配を感じ取っていた。

だから、ペンダントの気配しかないとわかれば、指輪が仕掛けてくる可能性はありそうだ。

『察知できるのは実体化してる神器だけだ。主の精神と同化してると、主の魔力に溶けてる状態になるから、その主に触れでもしない限りは察知できない』

ペンダントが代わりに答えてくれて、なるほどと私は納得したけど、ライはなぜかじつとペンダントのほうを見ている。

『ライ、どうかした？』

『……いや、なんでもねえ。それより、さっさと行きな。遅れたら意味ねえだろ』

『はい……』

ふうと一息ついて、ドアノブに手をかける。

私はげんなりとした気持ちになるべく隠しながら部屋を出た。

◇◇◇

離宮の外に出た私は、すでに待機していた兄妹たちに出迎えられた。

新入生歓迎パーティーなので、学生は基本的に全員参加。そしてなんと、お父さまやお母さまたちも参加するんだって！

レーシャン・マナに通う生徒たちは、国の未来を担^{にな}う人材と言っても過言ではない。そんな彼らの催しに顔出ししておくのは、国王として意味のあることなのだろう。

でも、普段のお仕事もあるから、本当に顔見せするだけらしいけど。

そんなわけなので、出迎えてくれるのは兄妹たちだけなのだ。

そして当たり前だけど、パーティーのため、全員がきらびやかな衣装を身に纏^{まと}っている。

その眼福すぎる光景に、感嘆のため息がこぼれる。

(全員別格だあ……！)

ヴィオレーヌお姉さまは紺色を基調としたドレスに銀系の刺繍^{ししゅう}、まるで夜空を纏っているかのようだ。袖口や裾のフリルも黒く、シックな雰囲気がある。

夜の女神とたとえられそうな佇まい^{たたずまい}に圧倒される。

あつ、新人生歓迎パーティーは、招待さえあれば生徒以外も参加可能ですよ。いろいろな家と繋がるチャンスなので、どうにか招待状を手に入れて参加する貴族も多いみたいだ。

ヴィオレーヌお姉さまはすでに学園を卒業しているものの、パーティーには出てくれるみたい。

ありがたいような、不安が募るような、複雑な心境ですけども。

エルクトお兄さまは黒のジャケットコートを身につけている。襟や袖口には金系の細やかな刺繍。今のお兄さまはまるで騎士みたいだ。とても強いし気遣いもできるから、頼りがいがある騎士さまだ。

ルナティーラお姉さまは私がチョイスしたドレス。クリーム色に銀系の刺繍。袖口や裾には白いフリルがあしらわれており、胸元にはブラウンのリボン。

やっぱりお姉さまに似合う！ あれにして正解だった！

シルヴェルスお兄さまは紺色のフォーマルジャケットに金系の細やかな刺繍。デザインはエルクトお兄さまと似ているけど、色合いや雰囲気から、シルヴェルスお兄さまは貴公子みたいだ。

これは、さぞモテモテでしょうなあ。でも、やっぱり可愛いんだよな、お兄さまは。

ハステッドお兄さまはダークヒーローにしか見えない。白いフリルシャツ、黒のロングコートに赤い紐リボン。シンプルながら、それがお兄さまのダークな雰囲気を引き立てている。

これは、刺さる人には刺さるタイプだ。私は好き。

ルーカディルお兄さまはもう直視できない。青緑のフォーマルジャケットに青い蝶ネクタイの姿が尊すぎる。

あの姿で微笑^{ほほえ}まれてもしたら、信者をさらに増やしかねない。

私は完全にドレスに負けているけど、お兄さまたちはさらに磨きがかかっている。

この兄妹の中に混じるとなると、空気になるところか異物になりそうで、今にも不安が最高潮に達しそうだ。

「わあ！ アナ可愛いね！」

真つ先に私を褒めてくれたのは、シルヴェルスお兄さま。

「ありがとうございます。お兄さまも可愛いです！」

「やっぱり可愛いなんだね……」

シルヴェルスお兄さまはしょんぼりとしてしまう。だって可愛いんだから仕方ない。

「俺は？」

「僕はカッコいいでしょ？」

ルーカディルお兄さまとハステッドお兄さまが、褒めてとばかりにキラキラとした目で私を

見る。

「ハーステッドお兄さまはカッコいいですけど、ルーカデイルお兄さまは尊いとしか言いようがありません……」

「尊いつてなんだ……？」

私の言葉を理解できないのか、ルーカデイルお兄さまが首を傾げる。やっぱり尊いとしか言いようがありませんよ。

制服姿を褒めた時もそうだったけど、もしかしたらこの国には尊いという言葉がないのかもしれない。それか、褒め言葉としては使わないのかも。

でも、尊いという言葉は説明を要する言葉ではない。インスピレーションで感じ取ってもらおう。

「アナ～！ 私は～？」

「ルナティールお姉さまもとっても可愛いです！」

私がチョイスしたドレスだから当然だけど、実に私好みです。今日しか見られないと思うと実にもったいない。

「今度は私もアナにドレス選んであげるからね」

「はい！」

私は元気に返事をするけど、周りの空気が冷たい。

周囲に視線を向けると、こちらに冷たい視線を向けてくる兄たちがいた。

参加していないのはヴィオレーヌお姉さまとエルクトお兄さまくらいで、この二人は呆れた視線を向けている。

「ルナティール姉上、私もってどういう意味ですか？」

シルヴェルスお兄さまの言葉に、ルナティールお姉さまはなぜか勝ち誇ったように答える。

「このドレスはアナが選んでくれたのよ。だから、今度は私が選んであげるってこと」

ちよつとお姉さま！ この人たちにそんなこと言ったら……！

「姉上だけずるい！ 僕だって選んでもらいたいのに！」

「俺だって……」

ハーステッドお兄さまとルーカデイルお兄さまから不満の声が上がる。

シルヴェルスお兄さまはと思っていると、お兄さまが私のほうに近づいてきて言う。

「アナ、今度は僕と一緒に出かけようか」

「えっ？ で、でも……」

お姉さまたちと違って、王位継承権一位で正妃の息子であるシルヴェルスお兄さまは、そうほいほいと出かけられないのでは……？

そんな心の声が顔にも出ていたのか、シルヴェルスお兄さまは「安心して」と私の肩に手を置く。「理由ならいくらでも作れるから」

あれ？ 理由って作るものでしたっけ？

「じゃあ、僕とも一緒にお出かけしよー」

ハーステッドお兄さまが、シルヴェルスお兄さまの手を引き離しながら、私に笑顔で提案する。引き剥がされたシルヴェルスお兄さまは不満げな顔をしている。

「俺も……」

ハーステッドお兄さまの袖をくいくいと引っ張りつつ、ルーカデイルお兄さまが訴える。

同い年だけど、こういうところは弟っぽいな。

ハーステッドお兄さまは嫌そうな顔をしているものの、仕方ないとばかりにため息をついた。

なんか、お兄さまたちのお出かけが決定したっぽい……？　なら、護衛騎士の三人に話を通しておかないと。

「話はそのくらいにしておけ。そろそろ行くぞ」

「はい」

私がエルクトお兄さまの言葉に従って馬車のほうに向かうと、肩にぽんと手を置かれる。

この流れはもしかして……？

私がおそろおそろ振り返ると、そこにはルナティーラお姉さまがいた。

「アナは私と一緒に行きましょ」

「姉上は帰りでもいいでしょう。行きは僕と一緒に乗ります！」

「ええー！　僕も行きがいい！」

「俺も……」

ルナティーラお姉さまに対し、シルヴェルスお兄さま、ハーステッドお兄さま、ルーカデイルお兄さまが口々に言う。

いつぞやの時のように、誰が私と一緒にの馬車に乗るかの争いが始まってしまった。

以前と違うのは、行きと帰りで分かれようという考えがあることだろうか。

多分、しばらくはお互いに譲らないんだろうな。この意地っ張りな兄姉たちは、折れるまでとても時間がかかるから。

本音を言うなら、パーティーには参加したくないけど、参加しなければならなささと終わらせてしまいたい。だから、折れるのを待ってなんていられない。

「私はエルクトお兄さまとヴィオレーヌお姉さまと一緒にいきますから」

学園の時とは違って、今回は七人揃っているの、四人と三人でバランスよく分かれることができる。

それに、エルクトお兄さまだけでなくヴィオレーヌお姉さまもセットなので、いつものずいぶん言はしにくいはずだ。

お兄さまたちはショックを受けたような顔をしてはいるものの、その口から文句が出てきたりはしなかった。

そんな兄姉たちに、エルクトお兄さまとヴィオレーヌお姉さまは冷たい目を向ける。

「行くぞ、アナスタシア」

「参りましょう、アナスタシア」

「は、はい……」

チラチラと後方を気にしながらも、私はエルクトお兄さまとヴィオレーヌお姉さまの乗る馬車に乗り込んだ。



馬車の中で、私はエルクトお兄さまとヴィオレーヌお姉さまと向き合っていた。後方の馬車からはなぜか寒気を感じる。

気のせいだと思っておこう。後ろの馬車の御者は縮こまつてるだろうな……

「今日はペンダントを持ってこなかったのか」

エルクトお兄さまに聞かれた。

「あつ、はい。必要以上に注目を集めないようにしたほうがいいかと……」

本当のところは、ライがついてこないと言ったから置いてきたつてのが正しい。

学園には、私を守るためと、お兄さまたちが城を離れるからという理由で持つていった。ただ、それでも指輪には襲われたし、ライがその場にいなかったから対処が遅れて、カイエンまで危険な

目にあわせてしまった。

またそうなるくらいなら、ライの側にいさせたほうがいい。たとえお城にやってきたとしても、ライがその場にいれば下手に手出しはできないだろうし。

ペンダントの気配を感じなければ、私にも手出ししないだろう。

向こうが欲しがっているのはペンダントの身柄であつて、私自身ではないはず。

「まあ、賢明な判断ではあるな」

「ええ。あの場で目立つても何もいいことはありませんもの」

エルクトお兄さまの言葉に、ヴィオレーヌお姉さまが同意する。

似た者同士だからか、考えがよく一致してて、二人の意見が食い違うことつて滅多にないんだよね。というか、見たことないし。

「やつぱり、パーティーでは一人にならないほうがいいんですか？」

フウレイのマナー講座でも、もう一人の侍女のヒマリからも、私はなるべく一人にならないように

にと言われた。

私は一人のほうが気楽ではあるんだけど……

「格好の獲物だろうからな」

「ええ。少なくとも側近の彼は連れていなさい」

やつぱりかあ……

二人から予想通りの答えが返ってきてげんなりする。いや、別にいいんだけど、カイエンの前でお姫さまモードになるのは恥ずかしいんだよね。

カイエンに笑われたら多分立ち直れない。まあ、あのカイエンでもさすがにそんなことはしないと思うし、してきたらお姉さまたちにチクってやろう。

「何かあればハーステッドに頼るといい。俺たちに比べれば、あまり人が寄ってこないだろうからな」

「はい、わかりました」

魔法に突出した才を持ち、容姿端麗のヴィオレーヌお姉さま。

兄姉の中で最強と謳_{うた}われる眉目秀麗のエルクトお兄さま。

治癒姫の異名を持ち、女神の化身と称えられるルルエンウィーラさまと生き写しのルナティーラお姉さま。

王位継承権一位の次期国王で、アルウェルト王家の象徴である金の瞳を持つシルヴェルスお兄さま。

男でありながら、女性と見紛う中性的な顔立ちで多くの信奉者を生み出すルーカディルお兄さま。この五人と比べたら、ハーステッドお兄さまは少し霞むかもしれないね。それでも、闇魔法はアルウェルト王家でトップクラスの実力だし、容姿もダークヒーロー感があって私は好きなんだけど。それにハーステッドお兄さまは、一緒に過ごす相手としては兄姉の中で一番だし、頼りやすくはあるかも。

「わたくしたちも、なるべくあなたのほうに気かけようにはしますが、決して油断しないように」

「は、はい」

ヴィオレーヌお姉さまからの注意に私は体を強_{こわ}ばらせる。

危ない危ない。お兄さまたちがいるということに安心感を抱くところだった。いつでも頼れるわけではないんだし、自分でもどうにかできなくちゃいけないよね。

今から、お姫さまモードに切り換えなくちゃ。

◇◇◇

パーティー会場に着いた。

学園の新生歓迎パーティーは、人数が多いため、学園所有のホールで行われる。その建物は学園の敷地内にはないものの、そこまで距離が離れているわけではなく、学園からなら徒歩で十五分ほどで着くくらいのあるところにある。

学園でイベントを催す際に使うそうだ。全校生徒とその保護者が集まれる規模となると、さすがにあの広い学園でも該当する建物はないんだろうね。

まあ、敷地の外に学園所有の建物があるだけですいいんだけど。

「行くぞ」

馬車を降りる時エルクトお兄さまが手を貸してくれる。私とお兄さまは少し身長差があるのに、私が手を取りやすい位置に出している。

さらっと気遣いできるところがお兄さまのいいところだ。

「ありがとうございます」

私がエルクトお兄さまの手を取って馬車を降りると、すでに兄姉たちが待っていた。

「どうして兄上がエスコートするんでしょう？」

ルナティーラお姉さまが不満げに言う。エルクトお兄さまは呆れた視線を向けて答えた。

「馬車から降りただけだろうが」

「その役目は姉上でも……なんだったら私でもいいわけでしょう？」

私でも、という部分だけ語気が強かったように感じたのは気のせいかな。うん、そう思うことにしよう。

「それなら、会場までは僕が連れていきます」

「あつ、兄上ずるい！　僕がやりたい！」

「俺も……」

お兄さまたちは、誰が私をエスコートするかで争い始めてしまった。

「一人で入ったらダメですか？」

「『ダメ!!』」

こういう時だけ息ピッタリで私の言葉を否定する。

ああ、もう！　この兄姉たちは本当に……！

「では、わたくしがアナスタシアを連れていきますわ。あなたたちは各自でいいでしょう」

断る余地は与えないとばかりに、ヴィオレーヌお姉さまが私の手を引く。

本当に突然のことだったので、私は少しバランスを崩し、ヴィオレーヌお姉さまにもたれかかってしまった。

怒られるかと思ったけど、ヴィオレーヌお姉さまは優しい手つきで私を支えてくれる。それどころか、私の頭を押さえつけるようにして抱き寄せてきた。

えっ？　はっ？　何事!?

「構いせんわね？」

何やらヴィオレーヌお姉さまが会話をしているみたい。でも、お姉さまらしからぬ行動に困惑していて、会話の内容はほとんど頭に入ってこない。

しばらくして私の頭は解放される。どういふつもりだったのかと、私は見上げるようにしてヴィオレーヌお姉さまと目を合わせた。

「あの——」

私が真意を尋ねようとすると、お姉さまは口元に人差し指を当てた。

何も聞くなと言っていることは、それだけで読み取れた。

「では、行きましょうか」
「は、はい……」

結局、お姉さまの謎行動の真意はわからないまま、私は会場入りした。

◇◇◇

パーティー会場はすでに大勢の人でごった返していた。各々が交流を重ねて、人々の声が音楽と共鳴するかのように会場に響いている。

そして、そんな賑やかな空間は、さらに盛り上がることとなる。

レニシエン王国トップの権力者であるアルウェルト王家が入場してきたのだから。その盛り上がりぶりは、まさにライブ会場さながら。

「ヴィオレーヌさま、美しい……！」

「エルクトさまだわ！ 素敵……！」

「ルナティイーラさま、なんて可憐なんだ……！」

「シルヴェルスさまも気品があるわ……！」

「ハーステッドさまは影があるわ……」

「ルーカデイルさま……直視できない」

そんな声があちらこちらから聞こえて、改めてお兄さまたちの人気ぶりを再認識する。

当の本人たちは普通だけど。むしろ、煩^{わづら}わしいとばかりに顔を歪めているくらい。

でも、皆さまの感想には激しく同意します。特に、ハーステッドお兄さまとルーカデイルお兄さまに關してのものは。

お兄さまたちが注目されているうちに、私はすーっと空気のように会場入りした。私に対する反応は、特に聞こえてこない。

よしよし、誰にも気づかれずに潜入成功。このまま抜き足差し足忍び足で壁の花に……

「何をこそそしてるんですか？ アナスタシアさま」

「へあっ!？」

後ろから声をかけられたことで、変な声を出してしまった。声の主は、会いたかったような会いたくなかったような人。

「驚かせないでよ、カイエン……」

「私はあなたの悲鳴に驚きましたけど」

呆れた視線を向けてくるカイエンも、きつちりと着飾っている。

髪色と同じ紺色のフォーマルジャケットを着ている。飾り気はあまりないけど、そのシンプルさがカイエンの魅力を引き立てていた。

「カイエンも今日はカッコいいね」